

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10894

研究課題名（和文）産科看護職を対象とした虐待発生予防に向けた看護実践の意識化プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Nursing Practice Awareness Program for Obstetric Nurses to Prevent the Occurrence of Child Maltreatment

研究代表者

大友 光恵 (otomo, mitsue)

聖徳大学・看護学部・講師

研究者番号：00832320

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：産科医療機関に勤務している看護職（看護師・助産師）を対象に、子ども虐待発生予防に向けた看護実践の意識化プログラムを開発し、無作為化比較試験を実施した。教育プログラムは2回の講義とグループワークとした。介入群28名（脱落率9.7%）、対照群26名（脱落率13.3%）の分析結果として、プログラム直後に、虐待発生予防に向けた看護実践自己評価尺度（NES-CMP）の要因「信頼関係の構築」、「育児支援必要度の査定」、子ども虐待発生予防に向けた看護実践の意識、モチベーション、自信の得点が、介入群は対象群に比べて有意に増加した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義は、増加する子ども虐待に対して、早期把握と早期支援の重要な位置にいる産科の助産師・看護師に、虐待発生予防の看護実践の意識を高めることができた点にある。この研究により、教育プログラムは看護師・助産師が虐待発生予防に取り組む意識やモチベーションに影響があり、親子の安全と福祉向上に貢献することが期待される。本研究の課題については今後検討、修正する必要があるが、全国の各医療機関で利用できる教育プログラムになる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：A randomized controlled trial was conducted to develop an awareness program of nursing practice for the prevention of the occurrence of child maltreatment for nursing professionals (nurses and midwives) working in obstetric care facilities. The educational program consisted of two lectures and group work. The results of the analysis of 28 participants in the intervention group (dropout rate: 9.7%) and 26 participants in the control group (dropout rate: 13.3%) showed that immediately after the program, the factors of the Nursing Practice Self-Assessment Scale for the Prevention of Child Maltreatment (NES-CMP), “building trusting relationships,” “assessing the need for childcare support,” awareness of nursing practice to prevent the occurrence of child maltreatment, motivation, and confidence increased significantly in the intervention group compared to the target group.

研究分野：公衆衛生看護学、母子保健

キーワード：子ども虐待発生予防 産科 助産師 看護師 看護実践 意識化 プログラム開発

様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 ( 共通 )

## 1 . 研究開始当初の背景

日本では、子ども虐待相談件数は上昇しており、虐待死亡事例の件数は減少していない。背景に、親の精神疾患や社会的ハイリスク、予期しない妊娠などがある。国はその対策のため、妊娠期から産後までの切れ目のない支援を推進している。

その中で産科医療機関は、親子の虐待リスク要因の早期把握と退院後の生活を予測した切れ目のない支援をする役割をもっている。そのために、支援が必要な親子に関しては、産科医療機関から退院後、保健センターなど関係機関の支援者の関与を拒否されず支援をつなぐことが重要である。先行研究では、看護職は支援が必要な母親を把握した後、看護職が母親との信頼関係を活かして、家庭訪問をする保健師が拒否されないように橋渡しをしていた。また保健師とタイムリーに情報交換をすることで必要な支援の在り方を検討し、「継続的」、「重層的」かつ「機を逃さない」支援をして虐待発生予防につなげていた(大友ら, 2013)。このことから、産科勤務の看護師、助産師(以下、看護職とする)が虐待リスク要因に「気づく」と同時に、継続支援につなげることが虐待発生予防に重要であり、そのような支援ができる看護実践が求められているといえる。

しかし、看護職の中には虐待発生予防にはどのような看護実践が良いか迷ったり、「何か気にかかる」母親に気づいても自信がないので誰にも報告しない人がいたりすることが明らかになった(前田ら, 2007, 武田ら, 2010)。そこで、先行研究では子ども虐待発生予防の看護実践を探索し、虐待発生予防に向けた看護実践自己評価尺度 - 産科病棟看護職版 - (以下、NES-CMP とする)を作成した(大友他, 2018)。虐待発生予防に向けた看護実践の成果は見えにくい。そのため、子ども虐待発生予防に向けた看護実践を促進するために、虐待リスク要因の「気づき」や継続支援につなげるなどの看護実践の意識化を図り、モチベーションや自信を高めることが必要であると考えた。

## 2 . 研究の目的

産科に勤務する看護職の子ども虐待発生予防の看護実践の意識を高めるため、スタッフの教育も行えることができる中堅以上の看護職を対象にした。子ども虐待発生予防に向けた看護実践の意識化プログラムを開発し、効果を検証することを目的とした。仮説は、介入群は対照群に比べ、NES-CMP の得点が上昇し、子ども虐待発生予防に向けた看護実践の意識、モチベーション、自信が高くなるとした。

## 3 . 研究の方法

### (1)研究デザインとリクルート方法

本研究は、無作為化比較研究である。全国の分娩を取り扱っている(100床以上)688施設へ、依頼書を送付した。サンプルサイズは、先行研究を参考に、脱落群も算定し、対照群24名程度、介入群24名程度とした。参加要件は、産科病棟に勤務している看護職(助産師、看護師)で、中堅看護職(5年~10年程度)または中間管理職、メールアドレスがある、A講義前半グループとB講義後半グループどちらに振り分けられても可能な方とした。

### (2)教育プログラムの手順と概要

プレテストは、2021年9月~10月に助産師3名を対象にオンラインで実施した。プログラム内容のわかりやすさ プログラムの時間設定の負担感 アンケートの回答のしやすさ オンラインでの課題を調査し、本研究のプログラムを作成した。

本研究は、2022年6月~11月に実施した。2022年6月末に両群に同様のテキストとアンケート

ートを送付した。2022年7月に介入群は、オンデマンド講義とオンライングループワーク（以下、プログラムとする）を全2回実施した。1回目の講義内容は1.母子を取り巻く環境の変化と課題、対策、2.虐待発生予防に向けた看護実践：信頼関係の構築、3.虐待発生予防に向けた看護実践：育児支援必要度の査定、4.虐待発生予防に向けた看護実践：チームケアの実践、多職種支援体制のための調整、5.地域の保健師はどんな母子支援をしているの？とした。2回目の内容は、1.子ども虐待の現状と予防、2.メンタルヘルス、3.DV、4.妊娠クライシス、育児支援の社会資源、5.病院と地域が連携したら何かいいことある？事例紹介とした。所定の日時にオンラインでグループワーク（以下、GWとする）（90分）を行った。GWの目的は、メンバーの交流、チームの実践の振り返り、子ども虐待発生予防に向けた看護実践（以下、看護実践とする）に対する思いを共有し、看護実践の意識や、モチベーション、自信を高めることとした。評価はアンケートで実施した。実施時期は、初回調査（T1）とプログラム直後（T2）、プログラム1か月後（T3）、プログラム3か月後（T4）の計4回とした。介入群のみにプログラム直後（T2）に、講義の評価アンケート（理解度、満足度、自由記載）を追加した。対照群へのアンケートは、介入群と同内容であり、同時期に実施した。

### (3) 調査項目、データ収集期間

調査項目は、基本属性、所属施設の組織体制、個人の経験、自由記載とした。プログラムの効果は、NES-CMP、看護実践の意識、モチベーション、自信で評価した。NES-CMPは「多職種支援体制のための調整(8項目)」、「支援関係の構築(8項目)」、「育児支援必要度の査定(10項目)」、「チームケアの実践(4項目)」の4因子30項目(0~120点)からなる。5段階(0~4点)リッカートスケールで測定した。看護実践の意識、モチベーション、自信については、0~10の10段階リッカートスケールで測定した。プログラム直後(T2)のみ「本研究参加後、看護実践の意識の変化」について自由記載を追加した。実施期間は2022年6月~11月であった。

## 4. 研究成果 結果

### (1) 研究協力者の概要

研究の承諾があった61名を、無作為に介入群(31名)、対照群(30名)に割り付けをした。介入群をA講義前半グループ、対照群をB講義後半グループと命名し、盲検化をした。介入群31名の脱落は3名(脱落率9.7%)であり、分析対象は28名となった。対照群30名の脱落は4名(脱落率13.3%)であり、分析対象は26名となった(図1)。脱落理由は、要件外、予定が合わない、返答がないであった。

研究協力者は、すべて女性であった。介入群は、助産師26人、看護師2人、平均年齢39.5(SD8.3)歳、職位は管理職10人、スタッフ18人、産科勤務年数13.4(SD7.0)年であった。対照群は、助産師26人、看護師0人、39.4(SD7.8)歳、職位は管理職6人、スタッフ20人、産科勤務年数14.4

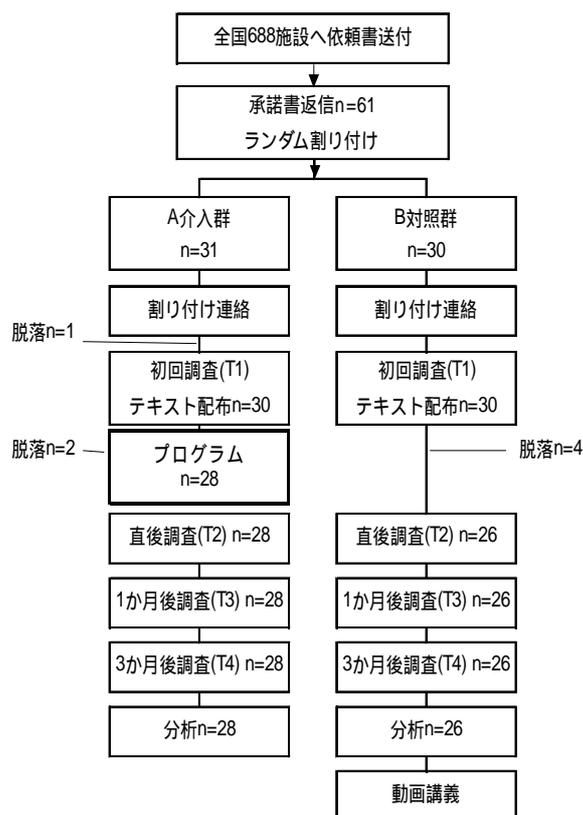


図1研究のフローチャート

(SD6.9)年であった。属性の比較では、介入群と対照群で有意差のある項目はなかった。

(2)プログラムによる NES-CMP の変化

NES-CMP の合計得点には、初回調査で有意差はなかった(表1)。プログラム後も NES-CMP の合計得点には、介入群と対照群に有意な差はなかった。しかし1か月後に、介入群の得点は対照群に比べて上昇した。

NES-CMP の4要因別の結果、「多職種支援体制のための調整」は、介入群と対照群の得点に有意差はなかったが、1か月後に得点が増加し、3か月後も低下がなかった。「信頼関係の構築」の得点と変化量は、プログラム直後(T2)と変化量1(2回目調査-1回目調査)( $p < .05$ )は有意な差がみられた。「育児支援必要度の査定」の得点と変化量は、プログラム直後(T2)( $p < .05$ )と変化量1(2回目調査 - 1回目調査)

表1 NES-CMP, 看護実践の意識, モチベーション, 自信の変化

項目	介入群			対照群			群間比較 p値	
	n	Median	四分位範囲	n	Median	四分位範囲		
NES-CMP 合計	T1 初回調査	87.5	82.0-94.0	89	79.0-97.3	.7816		
	T2 直後	89	80.8-94.0	84	63.3-95.3	.1504		
	T3 1か月後	90.5	85.5-94.8	85	71.8-97.8	.1997		
	T4 3か月後	28	89	83.3-95.5	26	91.5	80.5-108.0	.6649
	変化量1		-0.5	-6.0-7.5		-2	-9.3-11.3	.1456
	変化量2		4	-7.5-8.0		0.5	-5.5-4.3	.3318
	変化量3		0.5	-4.8-6.8		5	-4.3-11.3	.4883
NES-CMP 第1因子 多職種支援体制のための調整	T1 初回調査	24.0	18.5-26.0	24.0	21.5-26.0	.5950		
	T2 直後	24.0	20.3-27.0	24	13.5-26.3	.6392		
	T3 1か月後	24.5	23.0-27.0	24.0	19.0-25.0	.1650		
	T4 3か月後	24.5	21.5-27.0	25.5	20.8-30.0	.5314		
	変化量1		0.0	-0.8-3.8		0.5	-3.3-3.3	.4086
	変化量2		1.5	0.0-3.0		0.0	-2.0-1.6	.0626
	変化量3		0.5	-2.0-4.0		1.5	-1.0-5.3	.7090
NES-CMP 第2因子 信頼関係の構築	T1 初回調査	24.0	22.0-24.0	24.0	19.0-25.3	.6501		
	T2 直後	24.0	22.3-25.0	22.5	17.8-24.0	.0202*		
	T3 1か月後	24.0	22.0-25.0	23.5	20.0-28.0	.5522		
	T4 3か月後	24.0	24.0-25.0	24.0	20.8-27.0	.5021		
	変化量1		0.5	-1.0-2.0		-1.5	-3.3-1.3	.0474*
	変化量2		1.0	-1.5-2.8		0.0	-2.3-3.3	.7799
	変化量3		0.5	0.0-3.0		1.0	-2.3-3.3	.8475
NES-CMP 第3因子 育児支援必要度の査定	T1 初回調査	30.0	27.3-32.0	30.0	27.8-32.3	.8145		
	T2 直後	30.0	28.0-31.0	27.5	23.0-30.3	.0498*		
	T3 1か月後	30.0	29.0-31.8	28.0	24.0-31.3	.1536		
	T4 3か月後	29.5	28.0-32.0	30.0	26.0-36.3	.7024		
	変化量1		-1.0	-4.0-2.5		-2.0	-6.0-0.3	.0414*
	変化量2		0.5	-5.8-3.0		-1.0	-5.0-0.3	.6443
	変化量3		0.0	-2.5-1.0		0.5	-3.3-4.0	.5781
NES-CMP 第4因子 チームケアの実践	T1 初回調査	12.0	11.0-12.0	12.0	10.0-13.0	.8644		
	T2 直後	12.0	11.0-13.0	11.5	9.8-13.0	.4984		
	T3 1か月後	12.0	10.3-13.0	12.0	10.0-13.0	.6572		
	T4 3か月後	12.0	11.0-13.0	12.0	10.0-15.0	.7982		
	変化量1		0.0	-1.0-1.0		0	-2.0-1.3	.7310
	変化量2		0.0	-1.8-1.0		0	-1.0-1.0	.8940
	変化量3		0.0	-3.0-1.0		0	-0.3-2.0	.3579

( $p < .05$ ), 変化量2(3回目調査 - 1回目調査)( $p < .05$ )に有意な差があった。「チームケアの実践」では介入群は1回目から満点であり、そのまま移行した。対照群もほぼ満点に近く有意差はなかった。

(3)プログラムによる看護実践の意識, モチベーション, 自信の変化

看護実践の意識

プログラム後の変化量1(2回目調査-1回目調査)( $p < .05$ )に介入群と対照群に有意な差があった。

看護実践のモチベーション

プログラム直後(T2)( $p < .05$ ), 変化量1(2回目調査 - 1回目調査)( $p < .001$ ), 変化量2(3回目調査 - 1回目調査)( $p < .05$ )に介入群と対照群に有意な差があった。

看護実践をする自信

プログラム直後(T2)( $p < .05$ )と変化量1(2回目調査 - 1回目調査)( $p < .001$ ), 変化量2(3回目調査 - 1回目調査)( $p < .001$ )に有意な差があった。

介入群の看護実践に意識に影響を与えたもの

介入群の看護実践に意識に影響を与えたものは、テキスト13人(46.2%), 講義1回目18人(64.3%), 講義2回目19人(67.9%), グループワーク28人(100%)であった。介入群の自由記載には、「サポートが必要な母親の早期発見のための情報収集とスクリーニングを意識するようになった」、「これまでのケアでいいと自信がついた」などがあった。

プログラムの満足度と理解度

1回目講義の満足度評価は、満足71.4%, 少し満足25.0%, 少し不満3.6%であった。2回目講義の満足度評価は、満足75.9%, 少し満足24.1%であった。1回目理解度評価はできた71.4%,

少しできた 28.6%であった。2 回目理解度評価は、できた 89.7%、少しできた 10.4%であった。

## 考察

### (1)プログラムによる NES-CMP の得点変化

NES-CMP の合計得点の比較では、両群に有意差がなかった。しかし、4 つの要因に分解して比較すると「信頼関係の構築」「育児支援必要度の査定」の要因は、プログラム直後 (T2) で介入群が対照群に比較し得点が有意に上昇した。これらは日常でよく行う看護実践であるため意識が行動に移しやすいためと考える。一方で「多職種支援体制のための調整」「チームケアの実践」は、プログラム前から高得点であったため、大きな変化は見られなかった。この理由は、研究協力者はリーダーシップや教育力がある中間管理職や中堅看護職なので、基本的に実践できている看護実践だったためと考える。

### (2)プログラムによる看護実践の意識、モチベーション、自信の変化

看護実践の意識、モチベーション、自信が主にプログラム直後 (T2) で、介入群が対照群に比較し有意に上昇していた。しかし、プログラム実施 3 か月後の得点は低下傾向にあり、介入群と対照群の意識やモチベーション、自信に違いはなくなっていた。人のやる気は刺激後、一定期間がたつと低下する傾向にある。そこで、子ども虐待発生予防の勉強会の他にグループワークや事例検討会など、話し合う機会が必要であると考え。

### (3)グループワークの効果

プログラム内容は講義と GW であるが、介入群の全員が、看護実践の意識に影響を与えたものはグループワークと回答した。自由記載から「これまでのケアでいいと自信がついた」という記載があり、GW によりポジティブな感情が引き起こされていた。他者の意見を聞いたり、フィードバックがあったりすることで、違う視点をもつことができ自己肯定感が高まったのではないかと考える。事例検討では、すべての参加者にとってエンパワメントになることが多いとされる (武井, 2022)。このことから、GW で話し合うことで意識の変化や、モチベーション、自信アップにつながっていたのではないかと考える。

## 今後の課題

本研究のプログラム (講義と GW) は 1 か月後に効果があった。しかし、3 か月後に低下傾向にあるという課題が明らかになった。今後は、看護職の意識を継続するために勉強会や事例検討会など意識を継続する対策が必要であると考え。

## 引用文献

- 前田和子,山城五月,下中壽美,他(2007): 児童虐待に関わる周産期病棟・NICU 看護職者に求められるコンピテンシー 沖縄県看護職者の経験と認識, 沖看大紀要,8,39-47.
- 日本産婦人科医会 (2021): 妊産婦メンタルヘルスマニュアルー産後ケアへの切れ目のない支援に向けて, 中外医学社, 東京.
- 大友光恵, 麻原きよみ(2013): 虐待予防のために母子の継続支援を行う助産師と保健師の連携システムの記述的研究, 日看科会誌, 33(1), 3-11. DOI: <http://doi.org/10.5630/jans.33>
- 大友光恵, 齊藤恵美 (2018): 子ども虐待発生予防に向けた看護実践自己評価尺度 産科病棟看護職版の開発, 日看科会誌, 38, 210-218, DOI: <https://doi.org/10.5630/jans.38.210>
- 武田弘子,中島静代,谷田征子(2010): 予防周産期からの子育て支援への取り組み(第一報)医療スタッフ意識調査について, FourWinds 乳幼児精保学誌, 2(3), 54-64.
- 武井麻子 (2022): 支援者を支えるコンサルテーションとスーパービジョン, こころの科学, 222, 26-31.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Otomo Mitsue, Suzuki Sachiko, Miyazaki Toshie
2. 発表標題 The change in midwives' and nurses' awareness resulting from a nursing practice program preventing child maltreatment beforehand with mother-focused support.
3. 学会等名 第26回East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Otomo Mitsue, Suzuki Sachiko, Miyazaki Toshie
2. 発表標題 Examining changes in awareness among midwives and nurses after participating in a child maltreatment-prevention nursing program(CMPNP) via content analysis
3. 学会等名 第26回East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 幸子  (Suzuki Sachiko)  (30162944)	埼玉県立大学・保健医療福祉学部・名誉教授    (22401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------